

ケース・スタディ
篠原猛史
Takeshi Shinohara

《White Noise N°P004-010》
2008年、個人蔵



皆さんはアーティストの創作活動にどのようなイメージをお持ちでしょうか？一瞬にして創造的なアイデアが閃き、作品を完成させてしまう天才の姿？それとも、長時間アトリエにこもって制作に没頭するちょっと変わった人？頻りに美術館に出かけ、多くの美術作品を鑑賞されている方でも、それらの作品がどのようなプロセスを経て作られているか、それを目にする機会はあまり多くないでしょう。

「behind the seen アート創作の舞台裏」展は、通常の美術展で見られるような作品(the seen)ではなく、その裏側(behind)にある、「作品が作り上げられるプロセス」にスポットを当てた美術展です。具体的には、認知心理学の研究室が現代アーティストを対象に行なったふたつのケース・スタディに基づいて、この美術展は構成されています。

「循環と波動」をキーワードに、多様な作品を創作している篠原猛史さんのケース・スタディでは、新しい作品アイデアの模索が始まり、それが形になるまでの数カ月間の創作プロセスを紹介します。作品に加え、篠原さん直筆のメモや写真等、創作途上に生み

出された多数の資料をご覧になれば、その完成度の高い作品の背後に、圧倒されるような量の思考の積み重ねが存在していることに気づかれるでしょう。

他方、緻密な絵画や映像作品の創作を通して、「世界とは何か」という問いを探求している小川信治さんのケース・スタディでは、10年以上にわたる作品シリーズの展開の様子に焦点を当てます。ここで小川さんの代表的な作品とその創作エピソードをご覧になれば、小川さんがなぜ次々と斬新な作品アイデアを生み出すことができたのか、その秘密を少しでも垣間見ることができるかもしれません。

私たちは、アーティストたちのアトリエに通って彼らの創作活動を調査しているうちに、作品が作られるプロセス「そのもの」が、人々の心をワクワクさせるアートの要素を持っていることに気づきました。それなのに美術展では完成した作品だけをきれいに展示して、「後はお見せしません」なんてちょっともったいない。ぜひ創作の舞台裏にも足を運び、できることならばアーティストの心の中までも覗き見て欲しい。それが、私たちが「behind the seen アート

創作の舞台裏」展を企画した理由です。

ちょっと風変わりなこの展覧会を、皆さんなりに楽しんでいただければ幸いです。

関連イベント

[アーティストによるギャラリートーク]

- 篠原猛史 — 10月25日(土) 14:00より
- 小川信治 — 11月8日(土) 14:00より

会場=東京大学駒場博物館 入場無料

[シンポジウム]

11月を予定

開催日時等の詳細は公式ホームページに掲載します。

東京大学 駒場博物館

東京都目黒区駒場3-8-1 Tel.03-5454-6139

<http://museum.c.u-tokyo.ac.jp/>



アクセス:京王井の頭線「駒場東大前」駅下車 徒歩3分

ケース・スタディ
小川信治
Shinji Ogawa

《Pirouette 1-10》(部分)
2000-02年



《Pirouette 1》



《Pirouette 4》



《Pirouette 5》



《Pirouette 6》



《Pirouette 7》



《Pirouette 8》